

『東方』二八二号より

いまあらためて「反戦」の 持つ意味を問い直す

川尻文彦（帝塚山学院大学）

本書は「現在、日本では戦争を知らない世代が約九〇パーセントに達したとされ、戦争の記憶が風化し始め、それに伴い戦争を美化する勢力が次第に増大する傾向にある」との書き出しからはじまる。菊池氏はそのような現状に危機感をおぼえ、今日にいたるまで不明点の多い日中戦争史に再検討を加えるため、重慶国民政府地域（重慶を中核とする四川、広西、貴州、湖南等の中国西南）における日本人捕虜・反戦兵士問題を取り上げたのだという。菊池氏は抗日戦争、華僑、工業合作社の研究者として知られ、本書は『中国工業合作運動史の研究——抗戦社会経済基盤と国際反ファシズム抗日ネットワークの形成』（汲古書院、二〇〇二年）に続く二冊目の著書になる。

本書の構成は以下の通りである。

序論

【第一編】

重慶国民政府地域における日本人兵士の反戦運動

——捕虜から反戦兵士に

第一章 反戦捕虜政策の論理と構造

——蔣介石、鹿地亘、白崇禧の史的役割

第二章 鹿地亘と日本人兵士の反戦運動

第三章 重慶国民政府の法令に見る捕虜管理とその特質

菊池一隆著

『日本人反戦兵士と日中戦争

——重慶国民政府地域の捕虜収容所と関連させて』

A5判・四九六頁・御茶の水書房・七、一四〇円



第四章 日本人捕虜収容所の中からの反戦

——捕虜管理と捕虜自治

【第二編】

重慶国民政府地域の日本人反戦兵士へのインタビュー

【第三編】

鹿地亘氏へのインタビューと有吉コージの講演

結論

本書は、第一編の研究論文編——本書の中核をなす——と第二・三編の関係者へのインタビューを収録した資料編の二つの部分から構成されている。

第一章は蔣介石の軍事構想・戦術のなかで情報獲得策としての「捕虜優待政策」の目的と論理、そしてそれが白崇禧、鹿地亘によってどのように「反戦捕虜政策」に転換したかを論じる。さらに優待政策の実施の困難とそれにもか

- ▼ 『東方』282号より
- 一 いまあらためて「反戦」の持つ意味を問い直す
- ▲ 川尻 文彦

かわらず継続されていく実態と理念を明らかにする。

第二章は鹿地亘らを中心にした反戦運動の活動実態を論じる。中国空軍による日本での反戦ビラの撒布、反戦同盟西南支部の桂南前線での反戦宣伝、反戦劇「三兄弟」の上演等。重慶地域における日本人反戦兵士の運動を背景、成立、経過、意義と限界等を詳細に論じる。そのことよって日本の侵略、中国の抗日という単純な図式を打破し、多角的視点から日中戦争の実態と本質に迫ることができるとする。

第三章は捕虜収容所、優待政策、捕虜自治、捕虜の人権等が法令的にいかに保障され、その内容や特質がいかなるものであるかを解明する。その際、報奨金制度の問題点と同時に中国兵優待と嚴罰との関連も考察する。

第四章は、鎮遠の第二捕虜収容所、さらにそれが移動した重慶捕虜収容所に焦点をしぼり、その実態を捕虜管理と捕虜自治を柱にして実証的に考察する。分析を立体化するため反戦同盟にくわわらなかった人々の動向にも着目する。

第二編は一〇名の元反戦兵士へのインタビューからなる。捕虜になった時期、状況、反戦運動に投じるきっかけ、徴兵前の経歴等、各人各様であり（一定以上の学歴をもった人が多い）、反戦運動を多面的に解明するうえで貴重な資料と言える。と同時に、彼らの日本帰還後の生き様、反戦運動の総括を知ることでもでき、興味ぶかい資料である。

第三編は著名な反戦運動の構想者・指導者の鹿地亘氏へのインタビューと有吉コージ（日系アメリカ軍人、中国戦線で活動した）の講演記録からなる。鹿地亘氏の反戦運動にしめる重要性に疑問の余地はない。運動の当事者としての貴重な証言である。

本書は「反戦」を表明することが現在とは比較にならない

トップページにもどる

いほど制限されていた当時の日本と戦時下の中国におけるその運動と思想の実態を詳細におった著作と言える。

明治維新以来の日本の近代史は、第二次世界大戦の敗戦にいたるまで戦争の連続の歴史であったとも言える。甲申事変（一八八四年）、日清戦争（一八九四年）、日露戦争（一九〇四年）、第一次大戦・山東出兵（一九一四年）、満州事変（一九三一年）、日中戦争（一九三七年）、太平洋戦争（一九四一年）、たえまなく海外への派兵を繰り返している。今日の我々からは想像を絶する世界である。

今日では、目的、原因が何であれ、戦争つまり見ず知らずの人同士が武器をもって殺しあうことの無意味さはいまさらいうまでもないことである。しかしながらハンチントンの「文明の衝突」論をもちだすまでもなく地域紛争をふくめた「戦争」が今後なくなることは残念ながらおそらくありえないし、そもそも「西洋ではホメロスの詩に唄われたミケーネ文化が栄え、東洋では殷の王朝が勃興した前五世紀ごろから今日までの三千五百年におよぶ歴史のなかで、戦争の記録のないのはわずか二百年余り」（猪口邦子『戦争と平和』東京大学出版会、一九八九年、一頁）に過ぎないのである。人類の歴史は戦争——これを逆にいえば「反戦」——でいろいろとられてきた。

中国における日本人兵士の反戦運動については、鹿地亘自身の著書『日本兵士の反戦運動』（同成社、一九六二年）、『反戦資料』（同成社、一九六四年）等も出版されているうえに（もちろん歴史資料としての可信性は吟味が必要だが）、安井三吉による先駆的研究（『抗日戦争時期解放区における日本人の反戦運動』『近きに在りて』第三号、一九八三年）、内田知行『抗日戦争と民衆運動』（創土社、二〇

〇二年）、本書の姉妹編ともいべき藤原彰・姫田光義編『日中戦争下中国における日本人の反戦活動』（青木書店、一九九九年）——中共系の八路軍、新四軍問題、捕虜問題を主に扱う。本書との併読をお勧めしたい——等、研究蓄積が少なからずある。

本書は「反戦」を唱えることがどのような意味をもったのかを一九四〇年代（重慶国民政府時期）当時の歴史的な文脈に位置づけようとしている。すなわち国民党史、国民政府史、抗日戦争史、日本国内・外での反戦運動史、戦争捕虜管理の国際比較、蒋介石研究、あるいは鹿地亘等の「反戦」運動家の人物研究、等々無数にある座標軸（この座標軸そのものも大きな研究テーマである）とどうかかわっているのかということを確認する、気の遠くなるような非常に難解かつ重要な作業といえる。

本書を通読してみても私が菊池氏に問いかけたのは、その作業を行なう前提として氏が「反戦」というものをどのようなと考えているのかということである。戦争は無条件に否定されるべきとする立場もありえるし、必要悪と考える立場もある。条件付きの賛成・反対もありえる。同じく「反戦」を唱えていても、人により時代により置かれた条件によりその意味は様々である。

というのも、例えば長谷川暢三氏は自らの運動を振り返って「いくら奇麗ごとと言ったって、戦争はなくなりませんよ。反戦同盟にしろ馬鹿な戦争は止めようと言う位のことしかできない」、自分たちは「ノンポリの世間知らず」（四二八頁）の運動に過ぎなかったという。また松原健二氏は「大体反戦同盟もおかしい。中国人民の抗日戦争に参加し、日本帝国主義の侵略に反対して闘ったことは立派なことだ。歴史に記録される事実だ。だが、これに日本の革命

トップページにもどる

が運動するという考えは完全に誤っていた」（三八八頁）として「反戦同盟の全てを否定した」（渡部富美男氏）（三三三頁）という。反戦運動の一部の当事者からも自らの運動に対してシニカルな意見が出されている。これらも反戦運動の一面であろうと思われる。これらを菊池氏はどのように解釈するのか興味をもたれるところである。

私は今（二〇〇四年五月現在）、アメリカ東北部ボストンとチャールズ川をはさんで対岸にある小さな学園都市ケンブリッジのハーバード大学ジョン・K・フェアバンク東アジア研究センターに滞在している。当地ではしばしばイラクでの戦況がテレビ報道されている。この戦争（そして戦後）を通じてアメリカ軍兵士の総死者数はすでに数百人に達している。「世界の警察」を気取って安易に軍隊派兵に訴えるアメリカに対して一九世紀の帝国主義時代に逆戻りしたかのような違和感をもっている人々はアメリカ人のなかにも数多い。

その一方で、ウェストヴァージニア州の片田舎の出身で戦争の過程で一躍「英雄」にまつりあげられた若者の例も思い当たる。彼女の評伝（『私は英雄じゃない——ジェシカ・リンチのイラク戦争』リック・ブラッグ著、中谷和男訳、阪急コミュニケーションズ、二〇〇四年）には「祖国に仕える——。これはジェシカのまわりにいるアメリカ人なら、誰がなんと言おうと、臆することなく口にする言葉だ。ジェシカは受け入れた。みなそうだった。彼女のまわりの兵士たちは、日々の生活に追われる肉体労働者の息子や娘、移民の子ども、それにシングルマザーだった。安アパートや安普請のレンガ建てや路地裏の貧民街から合衆国陸軍がかき集めてきた」（二二頁）とある。

「祖国に仕える」ことに何の疑問も感じないおそらく庄

倒的多数をしめる「普通のアメリカ人」——同書では「経済発展から落ちこぼれた彼ら」(同頁)とも呼んでいる——の姿が浮かび上がってくる。ジェシカ自身、家計の都合から幼稚園の保育になるための短大進学もままならず、その学費稼ぎのために軍隊行きを志願したわけである。

私と同じアパートに住むある老婦人は真のアメリカンヒーローは『ラスト・サムライ』のトム・クルーズなどではなく、中東で世界平和のために危険をかえりみず働いている無名の兵士たちだと静かに語っていたのを思い出す(とはいえ、アメリカ軍兵士によるイラク人捕虜虐待の事実が表面化してからアメリカ国民の間で急速に「反戦」の気分が充満してきているように見受けられる)。

私には『私は英雄じゃない』で描かれたアメリカ軍兵士の姿は、本書第二編のインタビューから浮かび上がってくる元日本兵の姿とだぶってみえてくる。異国の捕虜収容所という極限状態のなかで彼らをして「反戦」にかり立てたのはいったい何だったのだろうか。

本書を読めばその一端が分かってくるのではないかと思われる。

〔二〇〇四年五月一〇日脱稿〕

◀ 今月の『東方』

◀ 書評目次へ

▶ トップページにもどる